新書紹介

街並みの美学

芦原義信著

岩波書店　A5版　二六三頁　二六〇〇円

近年、都市の中に人間性の復権を目指す試みが盛んである。公害・没個性・非人間的・クルマ優先……等、「現代都市」に冠せられるこうした語彙への戦いが、遅まきながら始められている。たとえば既成市街地内の道路を歩行者モール化する動きは、今や世界各都市に拡がりつつあるが、これは車に占領された道路を歩行者に解放するという機能回復的意味合いと共に、路面舗装の美しいパターン、植樹による爽やかな緑、ベンチや水呑みなどのファニチュア類、さりげなく置かれる彫刻といった演出により、従来の都市の画一的な街並みに美しさと楽しさを与えるための試みでもある。

本書の著者である建築家・芦原義信氏は、個々の建築物と都市を結ぶ空間領域の在り方に対する深い洞察を通して、現代都市に欠けている「街並みの美」を創造することの必要性を、長年にわたり主張し続けてきている。特に、日本の都市が景観的に極めて貧弱であることの理由として、氏は、日本人と西欧人の精神的土壌の違いをあげて、次のように説明している。「わが国では伝統的に、家の内部に整然たる秩序をととのえ、家族を中心に一軒ごとに内的秩序を保ってきた。内部に秩序をもつということは、別な見方をすると建築の外部には無関心であることを意味し、都市空間の充実という構想は稀薄であった。それに対し、西欧諸国では、イタリアの広場などに見られるように建築の外部にも美しい模様の舗装が古くから発達し、また家の中まで靴のまま入るという習慣が生れてきた。この西欧の生活の中には外的秩序の考え方があり、日本の住いの中で行われるようなことが外で行われる。教会で祈り、公園で休み、レストランで食事をし、広場で談笑するということになるのである。」

和辻哲郎著「風土」を繰り返し引用しながら、著者は、今後、より良い街並みを構成していくためにはこういった空間領域に関する意識革命が必要であり、その上で街づくりのための積極的な努力が積み重ねられるべき事を強調している。

しかし、本書の特徴は何といっても、一二〇枚にも及ぶ豊富な図版と写真を使って、世界各地の街並みの美しさを紹介し分析して見せてくれる、その愉しさにあると言ってよいであろう。いくつか例をあげよう。氏の愛して止まないイタリア諸都市の広場では、周辺建物の建替えは、その快い閉鎖空間の質を保持することを第一義的に考えて実行される。そして、これら広場空間における「入り隅」の重要性が、ゲシュタルト心理学を通して語られる。さらに「入り隅」空間の応用例として、ニューヨークのロックフェラーセンターにあるサンクンガーデン(周囲より一段低い庭)をとり上げ、その周到な空間構成を多くの図と写真で解説してくれる。また都市内公園の在り方についても、街並みの中での公園機能についての深い考察から、多くの問題提起をすると共に、日比谷公園改造案を示し、さらにアメリカにおける新しい公園デザインの考え方の紹介を行っている。

ここには、街並みのデザインについて、多くの目標が語られている。では、街並みのデザインは、誰が、どうやって実現させていくのであろうか。本書には、この実現主体とプロセスについてのコメントはない。

街並みのデザインを実現化するためには多くの主体間の調整が必要となろう。また、デザインの質が向上すればするほど、施設管理の問題が重要度を増してくる。現実に横たわるこれらの困難を集中的に克服していくためには、誤解を恐れずに極論すれば、街並みデザインのコントロール主体はやはり都市自治体でなければなるまい。そしてその背後には、街づくりを自らの問題として意識し行動する市民の信託が当然ながら必要である。

本書が一人でも多くの市民に読まれて、街並みの美醜についての論議が沸騰せんことを願って止まない。

〈都市整備局開発課　小松崎　隆〉